

ちょっと心理学

思考停止が生む「陳腐な悪」

サトウタツヤ

ドイツの女性監督トロットによる映画『ハンナ・アーレント』が公開されています。

アーレントはドイツ出身の哲学者・思想家です。哲学者ハイデッガーの弟子にして愛人でもありました。ユダヤ人であるアーレントは、ナチスによって「命を余儀なくされ、米国に渡ったのですが、

戦後の1960年代初頭、イスラエル情報機関に逃亡先で逮捕されたナチスの戦犯アイヒマンの裁判を傍聴しました。

アイヒマンは、ホロコーストに関与し、数百万のユダヤ人を強制収容所へ移送するのを指揮した親衛隊中佐です。重大な計画の実行者なのだから、さぞや悪人であり、とんでもない人物だろう、というのが大方の予想でした。

ところがアーレントは、アイヒマンは上官の命令に従って業務をこなしただけの存在である、とリポートで喝破しました。「悪の陳腐さ」という彼女の指摘は、悪人の悪さを暴くことを期待していた多くのことから非難されました。もちろん、ナチス政権のや

ったことは許されません。しかし、そうしたことは一人の力では実行できず、官僚的なシステムが必要です。そのシステムの中の個人が、思考をやめ、指令に盲従することで、結果的に大いなる悪が実現していったのです。

この問題に心理学の立場からアプローチしたのが、米国のミルグラムです。彼の実験は、教師―生徒間における罰の与え方がどこまで残酷になりうるか、というものでした。

被験者(行動を観察される人)は、教師役

ツチを操作して発生する電圧は15〜450ボルト(と信じ込まされます)。最大の450ボルトは致死的なレベルで、本当に電気が流れたら死んでしまいます。

このような実験で、人は強い電撃を与えるものでしょうか? 事前の予想では、致命的な電圧をかける人はほとんどいないと考えられました。しかし実際にやってみると、60%ほどの人が「もっと強く」という指示に従って、最大の電圧をかけることをためらいませんでした。学生役の人がもたえ苦しむ(演技)の声を聞いても、最大の苦痛を与えたのです。

実験結果は驚きをもって迎えられるました。多くの人が上からの指令に従って残酷な任務を遂行することは、アーレントによる「悪の陳腐さ」を想起させるものです。

子どもの頃、悪いことをして叱られ、「だって、○○ちゃんやれよと言ったから」な

どと言い訳して、怒りの火に油を注いだ人はいませんか。「そんなら一生、○○ちゃん言う通りにしてなさい!」などと言われるのがオチ。人のせいにしてはいけないという道徳を学んだわけです。

アイヒマンは「だって総統に言われたんだもん!」とは言わなかったでしょうが、似たようなことを言ったはず。それは子どもなら一喝されるような弁明にすぎません。

上からの指令に盲従しているのか? それぞれの個人が倫理的に考え、踏みとどまる必要があります。アイヒマンの「悪」は、たとえ陳腐であっても許されません。それは正義に反するからです。

こうしたことは現代にも起こります。一人ひとりが正義の志向から遠ざかり、倫理的に考えず、道徳の歯止めもないなら、陳腐な悪を大量生産するかもしれないのです。(立命館大教授、心理学)

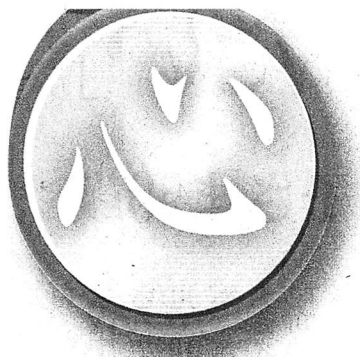


イラスト 梅田幸代